

『大原談義聞書鈔』における「無塵法界凡聖齊円理」の 解釈について

——西誉聖聡に着目して——

佐 伯 憲 洋

一 はじめに

浄土宗鎮西派の西誉聖聡が活躍した時代では、浄土宗の浄土・穢土、凡夫・仏を区分する考え方が、了義大乘の教えに反すると非難されていた。それは、夢窓疎石の『夢中間答集』巻下の、「凡夫ノ外ニ仏アリ、穢土ノ外ニ浄土アリト説ケルハ不了義ノ経ナリ。凡・聖、浄・穢皆差別ナシト明カセルハ、了義大乘ノ説ナリト云々。(中略)：浄土宗ニハ穢土ノ外ニ浄土アリ、凡夫ノ外ニ仏アリト立テラレタリ。了義大乘ノ説トハ申スベカラズ。」⁽¹⁾という記述からわかる。このような非難を受けて、聖聡は浄・穢不二、生・仏一如を説き、さらに浄土宗が諸宗を超越する教えであるという自説を展開するようになる。しかし、それまでの浄土宗義では、指方立相に立脚するのが基本であり、浄・穢不二、生・仏一如とは言

わない。したがって、聖聡が浄・穢不二、生・仏一如というには、他宗教義等の影響が考えられるが、その思想的淵源が明らかとなっていない。

そこで、それを知るために、本稿では、『大原談義聞書鈔』⁽²⁾の「無塵法界凡聖齊円之理」⁽³⁾という言葉の解釈に着目する。この語句は、『大原談義聞書鈔』の中、他力実体を説く箇所⁽⁴⁾で用いられ、善導の『観経疏』玄義分にある、「無塵法界、凡・聖齊円。両垢如如則、普該ニ於含識」。恒沙功德寂・用湛然。」という記述に基づく。この言葉は、理の境界では凡・聖が円融な状態であることを言ったものであり、聖聡は浄・穢不二、生・仏一如の意として引用している。したがって、聖聡がこの言葉を如何に解釈しているか知れば、浄・穢不二、生・仏一如という思想的淵源が知れるのではないかと考えている。

『大原談義聞書鈔』における「無塵法界凡聖齊円理」の解釈について（佐伯）

二 「搜玄即冥」について

さて、聖聡は、『大経直談要註記』巻二四で、「浄・穢雖二処異二土互相見。生・仏位別、一如互交通、在二穢界一見二淨利一。以二凡見一觀二聖境」。斯則、由二浄・穢二土搜玄即冥之一理一。亦則、由二無塵法界凡・聖齊円之義一也。」と言及し、「無塵法界凡聖齊円之理」を「搜玄即冥之一理」と同義であるとする。この搜玄即冥とは、懐感の『群疑論』巻一に依れば、土の浄相・穢相は心の認識によるもので、本質的には浄・穢の区別が無いということである。

雖_下復浄・穢両心現_レ浄・穢二土_一、心有二両体一、土成_中二相上、然同处・同時、不_レ可_レ言_下有_レ浄处無_レ穢、有_レ穢处無_レ浄、別处而現、而有_中障礙上。以_三同处・同時現_二浄・穢_一故。故、曰_二異質不_レ成。故、搜_レ玄即冥。搜者搜求也。玄者幽玄也。搜_二其幽玄旨趣_一、浄・穢両相冥然、同在_二一处_一、不_レ可_三分成二所_二也。詳、此_レ言_レ異質雖_レ成、搜_レ玄即冥_一。…（中略）…亦可_三浄・穢相殊_一、其体無_レ二。搜_二其实体_一、唯是一如故、言_二搜玄即冥_一。

したがって、聖聡も、相による差別は心によるもので、本質的には無差別であるという解釈を基にしている。例えば、『当麻曼荼羅疏』巻一六には次のような記述がある。

問曰、今此方以二日・水両觀一、為_二彼国無漏真觀_一。此義不_レ審也。浄・穢界異、凡・聖心隔故、如何。

答、若約_二法体不分義_一者、浄・穢不二、凡・聖一如也。無塵法界、凡・聖齊円。兩垢如如、普該_二含識_一。爰以、或云_下治生産業皆与_二実相_一不_レ相違_上。…（中略）…是則、法本融、事・理宛然。心自然和、性・相了然故也。実、阿鼻依正处_二極聖自心_一、毘盧身土不_レ越_二凡下一念_一。

この引用の最後に、「阿鼻依正处_二極聖自心_一、毘盧身土不_レ越_二凡下一念_一」と言う。これは、湛然の『金鉢論』⁽⁸⁾の言葉で、凡夫の心に毘盧遮那仏と、その土があるということを意図したものである。よって、聖聡は、浄・穢不二、生・仏一如を唯心浄土・己心弥陀に準えていることがわかる。因みに、聖聡が唯心浄土・己心弥陀を参照していることは間違いない。何故ならば、『大原談義聞書抄見聞』⁽⁹⁾には、次のような問答が設けられているからである。

問。唯心浄土・己心弥陀義、他宗所_レ存也。今何立_二此義_一耶。

答。豈先不_レ云乎。諸教所_レ談真如実相義、此教所_レ談他力実体辺、全是一同也。故、若依_二実体辺_一、浄・穢不二也故、云_二極樂不遠_一。又、即生・仏一如故、云_二弥陀在_二己心_一。

ここでは、『大原談義聞書鈔』にあった「他力本願之実体」という言葉を仲介して、「無塵法界凡聖齊円之理」とは真如実相のことであり、聖聡のいう浄・穢不二、生・仏一如が、

唯心淨土・己心弥陀と対応することを述べている。したがって、聖聡が淨・穢不二・生・仏一如というには、天台の思想に立脚しているということが確認できる。

三 聖岡より継承された思想について

聖聡の師である了誉聖岡も「無塵法界凡聖齊円」について言及している。

本来妙明元清淨体、人人具足心地、生・仏未分極位也。真如法性宗旨、雖義有少違、法体本自一致也。…(中略)…我宗名之「一法句」。於二本来寂滅广大妙明元清淨之处、無二教・行・証差、無二正・像・末別、上無攀仰、下絶二已躬。從來、無二向背、自元絶二羅籠。無塵法界、凡・聖齊円。兩垢如如、則普該二於含識。恒沙功德、寂・用湛然。指之、則云二不立文字、見性成佛。

聖岡は、「本来妙明元清淨体」が、生・仏未分の極位であるとし、それを「一法句」と言っている。そして、その「一法句」を「無塵法界、凡・聖齊円」と解釈していることが窺える。

また、聖岡は「無塵法界」について、良忠の『觀經疏伝通記』玄義分卷二の、「無塵法界者、一理異名。起信論云。三界虚偽、唯心所作。離心、則無六塵境界」⁽¹³⁾という記述を基にして、「一理異名等者、無塵之名、無煩惱義。所云法界者、是理法界。…(中略)…唯心所作等者、三界諸法是六

塵也。故云二心作。即無六塵等者、言若無二六塵、是云二無塵法界也。」と述べている。ここに引かれている『大乘起信論』⁽¹⁴⁾は、心外の事象は心の認識によって生じた事象であるため、心という認識作用を離れれば、現象(六塵)の無い境界となるという内容を示した箇所である。つまり、「無塵法界」とは、認識される相が無い理法界を意図したものである。

そして、「凡・聖齊円」について、『三六通裏書』を見ると、「相伝云、凡・聖齊円者、衆生一心、或時起二善念、或时起二惡念」。故、非二唯善心、非二唯聖、非二唯惡念、非二唯凡。善・惡具足円満故、云二齊円。」と言っている。要するに、衆生の一心には、善・惡、凡・聖等の両性が不可分に備わっているというのである。したがって、「無塵法界凡聖齊円」とは、心による相の差別を離れば、本質的には不二・一如であるという、上記の搜玄即冥に関する解釈と同義であると言える。

四 結

以上の考察により、聖聡は、「無塵法界凡聖齊円之理」を「搜玄即冥」と判断することで、淨・穢等の相は心の作用によるもので、本質的には不二・一如であることを念頭に置いていることがわかる。そして、『伝通記糅鈔』卷一・『三六通裏書』等の記述を承け、理法界では淨・穢、生・仏が不

『大原談義聞書鈔』における「無塵法界凡聖齊円理」の解釈について（佐伯）

二・一如であるという聖岡の解釈を参照している。したがって、聖聡が、浄・穢不二、生・仏一如を述べている思想的淵源には、師説の影響もあるが、天台教学、更に言えば、唯心浄土・己心弥陀という思想の影響があると考えられる。

1 『禅学大系編纂局禅学大系祖録部』第四卷、一喝社、一九二二、九三頁。

2 安居院聖覚が、大原問答を聞き書きしたものであると伝えられている。しかし、小西存祐氏等に依れば、聖覚は仮託されただけで、聖岡が加筆して創作した著書であると考えられている。今岡達音「大原談義について」（『浄土学』第五号第六輯、一九三三）、小西存祐「大原談義聞書鈔について」（『専修学報』第七号、一九三九）、服部淳一「『大原談義聞書鈔』考——聖岡教学との対比——」（丸山博正教授古稀記念論集『浄土教の思想と歴史』山喜房仏書林、二〇〇五）等、参照。

3 浄全一四・七六二頁上。

4 浄全二・一頁下。

5 浄全一三・二九六頁下。

6 浄全六・一三頁下——一四頁上。

7 浄全一三・五二七頁下——五二八頁上。

8 大正四六・七八一頁上。

9 本書の撰者は聖聡であると考えられていた。しかし、今岡達音氏のように聖聡の偽撰とする先行研究がある。したがって、一概に聖聡の真撰であると断定できない。本発表では、一先ず、聖聡の思想理解を扶ける傍証として用いることにする。今

岡達音「大原談義聞書抄見聞」解題（浄全二・五八八頁下——五八九頁上）、戸松啓真「『大原談義聞書抄見聞』について」（大谷旭雄 大本山増上寺発行『聖聡上人典籍研究』山喜房仏書林、一九八九）等、参照。

10 浄全一四・七八〇頁上。

11 『釈浄土三藏義』卷一〇（浄全一二・一二〇頁上）。

12 浄全二・一一九頁上。

13 『伝通記糅鈔』卷一一（浄全三・二六四頁下）。

14 大正三三・五七七頁中。

15 浄全一二・七七八頁上下。

〈参考文献〉

大久保良峻「台密と天台本覚思想」『仏教文学』第四二号、二〇一七
柳澤正志「天台の実践論——朝題目夕念仏・観心法門——」『天台学探尋』法蔵館、二〇一四

〈キーワード〉 聖聡、『大原談義聞書鈔』、無塵法界凡聖齊円

（早稲田大学大学院）